

会派視察・研修報告書

会派名 公明党
代表者名 寺島 芳枝

1 日にち	令和6年8月6日(火)
2 視察先 研修名、主催者及び会場	愛知県大府市 市役所
3 参加者	寺島 芳枝 片山 竜美 工藤将和
4 調査・研修の テーマ	不登校児童生徒(長期欠席者)への対応について
5 主な内容	・長期欠席児童生徒を支援する様々な施策について (教育支援センター・教育メタバース・養護教諭補助員・フリースクール等 授業料への補助金など)
6 所感、提言事項、課題等	<p>【寺島芳枝】</p> <p>2016年に、児童や生徒一人ひとりに合わせた学びの場を保障する、不登校(長期欠席児童・生徒)が教育の機会を損なわないことを目的として、「教育機会確保法」が成立し、2017年2月に完全施行された。</p> <p>これを受け大府市では、「登校という結果のみを目標にするのではなく、子ども自らが進路を主体的に捉えて、社会的自立をすることを重視し、「おおぶレインボープラン」を作成した。この考え方が、以下の7つの施策のベースになり、条件となっていることに感動した。</p> <p>① 学校内における居場所や教職員の充実(校内支援室の設置・支援員の配置(各中学校に1人)、養護教諭と補助員の配置による保健室2人体制(各小学校))</p> <p>② 学校外における居場所の充実(教育支援センターレインボーハウス、第二教育支援センターの整備・民間フリースクール等授業料の半額補助(1月上限2万円))</p> <p>③ ICT を活用した相談支援・居場所の充実(メタバースでの教育・相談支援)</p> <p>④ 相談支援体制の充実(SSW による支援の充実・心の教室相談員の配置(各中学校1人))</p> <p>⑤ 地域における活動との連携</p> <p>⑥ 切れ目のない支援に向けた関係機関との連携・情報交換・研究(未就学段階から中学校卒業までの情報連携)</p> <p>⑦ 長期欠席者への理解の促進(地域や保護者、教員等を対象に講演会の開催)と総合的な長期欠席者支援</p> <p>説明を聴き、できることは何でもやるとの思いが施策に反映されていると感じた。多治見市でも「児童等適応指導教室(さわらび学級)」から、「教育支援センター(さわらび)」に名称を変更し、先行している大府市の好事例を紹介しながら、誰も取り残さない教育の実現を目指していきたい。</p>

【片山竜美】

- ・ 「不登校」という言葉をできる限り使いたくないと、「長期欠席」としていただくことに共感した。
- ・ フリースクール等授業料補助金の対象者は、利用している学びの場が学習指導要領に準じていなくても、「自立のために支援すること」を条件としている。このガイドライン作成にあたり、反対の声もあったが、「教育機会均等法」等を理由に「子どものために」と粘り強く話し合い、実現させたとのことである。
- ・ 教育メタバースは、「楽しく学べた」等、長期欠席者には好評であり、「朝起きられるようになった」等、保護者からは喜びの声もあると伺った。なお、空間の活用と専属の講師をセットとし、年間 600 万円ほどかかるそうである。
- ・ 大府市では、全小学校で市費も活用して養護教諭 2 名体制を敷いている。これも、子どもの心と体のケアに重要であると同時に、教員の働き方改革にもつながると感じた。ただ、これでも教員はなかなか多忙であり、役割分担を更にしっかり考えないといけないという課題があると教えていただいた。
- ・ 適応指導教室から教育支援センターへ移行し、「学校へ戻す」から「居場所にする」よう変革をしてきた。ここでは、カウンセラーを日替わりで 5 名配置し、常に子どもたち、保護者、教員から悩みを聞く体制ができている。さらに、もう一つ別の場所に支援センターを設置する計画があると伺った。

大府市では、これら以外にも、あの手この手で、子どもの心身のケアの機会や長期欠席者の居場所をできる限り多くつくる努力をしている。成功するかしないかはわからないが、“子どものためにとにかくやってみる”こういった心意気があると感じた。

財政面もあり、全てを多治見市でできるかどうか分からないが、大人の意識改革を含め、“子どものために”できることを訴えていきたい。

【工藤将和】

全国の不登校児童生徒数が過去最多の約29万9千人となった(令和 5 年 10 月公表)ことを受け、大府市では、学校内外での環境づくりや各種相談体制を充実させ、児童生徒の自立と社会参加を図る目的で「おおぶレインボープラン」を発表した。その中で印象に残った部分は、以下のとおりである。

- ・ 「不登校」の言葉は使わず、市独自で「長期欠席」として扱っており、生徒への思いを強く感じた。
- ・ 学校内での居場所の充実として、市内全小学校の保健室で「養護教諭補助員」を配置し、市独自で保健室を 2 人体制にしており、それにより児童にとって相談しやすい環境が整い、先生の負担軽減にもつながっていると感じた。
- ・ 学校外では、教育支援センター「レインボーハウス」を平成 2 年に設置し、長期欠席児童生徒を対象に、学校復帰・社会参加に向けた支援を行っている。更なる充実を図るため、「第二教育支援センター」を整備

する予定だと伺った。また民間フリースクールへの補助金は、利用する保護者にとってもありがたい存在で、多治見市でも導入できればと思った。

- ・ 直接の面会や相談を不得意とする児童生徒への対応や、新たな居場所づくりとして、メタバースを利用した学習支援・相談支援を行っており、外出できない児童生徒にとって、受け入れやすい環境だと思った。

このように大府市では、あらゆる手を使いながら、長期欠席者に合わせた対応をし、保護者に対しても相談体制を整え、柔軟に対応している。また、いろいろ対応できる陰には、教育委員会や学校教員の積極的な試行事業への参加、その中でトライ&エラーを繰り返しながら、改善し苦労されている部分があることを伺い、大府市の積極性と熱意を感じた。

7 写 真 等
 ※視察の場合は必須、研修の場合は任意



※視察先、研修先ごとに1枚作成すること。
 ※「6 所感、提言事項、課題等」は、参加者全員分を記載すること。